

無料観光案内冊子の批判的談話分析 —そのレイアウトを中心に—

名嶋義直

東北大学大学院文学研究科

1. 目的, 手法, データ

身の回りにごく普通に存在しているテキストの中に、表面的な見え方と異なる意図が巧妙に取り込まれていることがよくある。それが人々や社会をコントロールする側の意図であった場合、我々はその権力の望む方向に誘導されてしまうおそれがある。それを避けるために、人は批判的リテラシーを身につける必要がある。本研究は、そのための具体的な着目点を示すことを通して、批判的談話分析（Critical Discourse Analysis；以下、CDA）が教育に寄与できること示したい。

社会は種々の問題を内包しているため、社会と主体的に関わるためには、情報を読み解き、考え、行動することが求められる。そこで有益なのがCDAの視点である。CDAは、社会の問題に目を向け、弱者側に立ち、権力の意図と実践を明るみに出し、それと向き合う方法を考え、最終的には社会変革のために行動することを目標としているからである。CDAの枠組みには、弁証法的関係のアプローチ・社会認知的アプローチ・談話の歴史的アプローチ・デュースブルグ学派のアプローチ等がある。本稿は比較的理解しやすいと思われる、ジークフリート・イエーガー氏（デュースブルグ学派）の提唱するガイドラインを、野呂（2015）も参考にした上で用いる。分析対象は『越前若狭 至高のありか 福井 [北陸新幹線開業 プレミアム福井特別号]』である。

2. 全体的な分析

イエーガー（2010：82-83）は新聞の分析を例に、さまざまな談話が絡み合った談話の束のようなものを全体的に分析する際の項目や着目点などをまとめている（一部加筆省略あり）。これを援用して当てはめられる部分を分析する。まず本冊子の位置づけである。JR 東京駅構内で平積みされていたこと、無料冊子であること、表紙に赤字で「祝開業!! 北陸新幹線」とあること、発行が2015年3月であることから、2015年3月に北陸新幹線が金沢まで通じたことに併せ、観光客誘致を目的にして一般市民に向けて作成された無料観光案内冊子と言える。発行部数は不明であるが、配布場所や配布方法を考えると、それなりの部数が発行されているものと思われる。

表1 全体的に分析する際の項目や着目点などのリスト

	分析項目	具体的な着目点や分析の方向性など
全体1	新聞の一般的な特徴づけ	政治的な位置づけ、読者層、発売部数など
全体2	そのテーマに関連する（た	取り扱う記事のリスト、書誌学的データ、テーマに関するキーワード

たとえば) その年度発行全体の概観	ード, 報道テキストの種類に関する特徴, その他の特別情報
	書かれていたテーマをまとめた概要, 質的な評価, 他の年度では取り扱われていた特定のテーマの欠如の有無, 特定のテーマがいつ取り上げられたか, またその頻度

3. 詳細な分析

3.1 着目点のリスト

イエーガー (2010: 83-84) は, ある談話を詳細に分析していく際の項目や着目点などをリストにしてまとめている (野呂 (2015) も参照, 一部紙幅の都合により加筆や省略あり)。

表 3 個別談話を詳細に分析する際の項目や着目点などのリスト

	分析項目	具体的な着目点や分析の方向性など
詳細 1	制度的な枠組み: コンテキスト	<ul style="list-style-type: none"> ・その記事を選択した根拠 ・著者 (新聞社における役職, 重要性, 専門とする分野など) ・記事が書かれたきっかけ, 原因 ・新聞, 雑誌のどの欄に記されていたか
詳細 2	テキストの「表面」	<ul style="list-style-type: none"> ・写真, 挿絵や図表も含めた, 視覚的レイアウト ・大見出し, 中見出し, 小見出し ・内容単位にしたがった記事の構成 ・取り上げられたテーマ, その他のテーマに触れられているか, 重なりが見られるか
詳細 3	言語的, 修辭的な手段	<ul style="list-style-type: none"> ・論証, あるいは論証ストラテジーに用いられている形態 ・論理と構成 ・含意, ほのめかし ・集团的シンボルもしくは「比喩性」 ・慣用句, ことわざ, きまり文句 ・語彙と文体 ・登場人物 (人物, 代名詞の使われかた) ・引用. 学問への依拠, 情報源の記載など
詳細 4	イデオロギー的な内容の発言	<ul style="list-style-type: none"> ・記事が前提としている, 伝えている人間像 ・記事が前提としている, 伝えている社会観 ・記事が前提としている, 伝えている科学技術観 ・記事が描いている未来像
詳細 5	まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・論拠, 記事全体における核となる発言, 伝えたい内容, メッセージ

本発表では紙幅の都合もあり, 以下の表の詳細 1 と詳細 2, 詳細 4 と 5 の考察を行う。

3.2 著者, レイアウト, テーマ

まず著者である。本冊子には奥付がないが, 見開き目次左側一番下という最も目が届きにくい

箇所には、他が縦書きであるのに対し横書きで、他よりも小さな字で発行者の記載があった。非常に顕在化しにくいレイアウトを意図的に選択している。発行者は関西電力株式会社原子力事業部地域共生本部であった。自治体や鉄道会社が観光案内冊子を作るのであれば理解できるが、社会的インフラとは言え、一電力企業が観光案内冊子を作るのは不自然に思われる。ちなみに本冊子の作成には福井県が協力し、福井県観光営業部発行の資料が参照されている。それが「地域共生」なのであろうか。このことについては、最後で再度取り上げることとして、次の分析に進む。

視覚的レイアウトである。115 頁、表紙も含め全てのページがカラー印刷であり、写真も鮮明なものが多用されている。紙もつやのある、丈夫そうな厚みのあるものが使われており、コストを掛けている印象を持つ。表表紙には右上に大きな黄色い文字で冊子タイトルがあり、下には赤字で「祝開業!! 北陸新幹線」とある。写真は恐竜の骨格と新幹線である。恐竜は県内に恐竜博物館があるので妥当な選択であるが、新幹線は、2022 年に福井まで延長されるとはいえ、現在は金沢までであり、金沢から福井までは在来線で 1 時間弱かかる。金沢からの訪問を期待して発行したのであろうか。一方、裏表紙は一面の砂浜と遠くに山々がそびえる海の写真 1 枚で構成されている。文字は空の部分に「ENERGY エネルギー」と入っているだけであるが大きく目立つ。

次に収録されている内容・テーマである。目次を見ると、風光明媚な観光名所・偉人・伝統芸・食・博物館等の学習施設・イベント・地図と多岐にわたり、観光ガイドにふさわしい網羅性を備えている。目次の最後に英語で「ENERGY」とある。裏表紙と呼応するが、目次を見る限り他に情報がなく何のことかわからない形となっている。その内容については 3.3 節で述べる。

レイアウトは非常に特徴的である。最初の 6 頁は観光見所のハイライトであり、2 頁の見開き目次を経て、96 頁が詳細案内である。最後に 2 頁の地図が掲載され、終わりを予想させる。しかし、続けて原発のページが続く。目次をよく見ると、本冊子は裏表紙を i 頁とし ix 頁までが観光案内とは全く異なるものであった。つまり、表から見ると観光案内冊子であるが、裏表紙から読むと「電力会社の PR」の性格が最初に現れる冊子となっていた。相対的に、後ろから読む人は少数であろう。多くの方は表の観光案内から読み進めるため、まず福井県に関して肯定的なイメージが構成され、そのイメージをコンテキストにして原子力の PR の入力を受けることになる。

3.3 取り上げられていないテーマとイデオロギー性

i 頁から ix 頁までは、「美しい砂浜の写真に ENERGY の文字（裏表紙）>各原子力発電所の紹介>原子力発電の安全対策（ソフト対策）>原子力発電の安全対策（ハード対策）>エネルギー PR 館紹介>エネルギー研究開発計画紹介」という内容構成になっている。まず裏表紙が i 頁であり、そこには「ENERGY エネルギー」とだけあって原発を想起させる情報はなく、レイアウト的にはこれがタイトルとなっている。ii 頁は関西電力の保有する 3 つの原子力発電所が写真と地図と発電量で示されている。しかし、それぞれの原発を巡る社会状況は説明されていない。美

浜原発1・2号機は2015年3月17日に廃炉が決まった。この冊子の刊行直後である。大飯原発は敷地内の活断層問題があり、2014年5月21日に3・4号機に対して運転差止判決が出ている。本冊子刊行10ヶ月前のことであるが冊子には記載がない。高浜原発も2015年4月14日に3・4号機に対し稼働させない仮処分が出された。関西電力の原発はいわば存亡の危機にあったわけであるが、それには一切触れず原発維持のイデオロギーで編集されていることがわかる。iii～v頁では「安全」について語っている。市民のニーズに合っていると見えるが、原発事故後「安全神話」という表現が広がったように、そこには「安全への信頼」というイデオロギー性を見ることが出来る。また、市民のニーズと言えば、「脱原発」のニーズの方が世論の過半数と大きいにも関わらず、その話題は一切出てこない。あくまで再稼働が前提となっている。viとvii頁は「楽しく遊んで学べるPR館」の紹介である。そこには原子力が科学であり、市民はそれを学ぶべきであるというイデオロギー性がある。「楽しく遊んで学べる」という部分には、市民を「難しい学びは苦手である」、電力会社を「科学知識があり教える立場である」とする人間像や社会観が垣間見える。viiiとix頁は社会貢献や産学連携事業についての説明である。取り上げられているのは再生可能エネルギー・エコ・医療・教育などである。リスクよりも利益を重視するイデオロギー性を見ることが出来る。なおエネルギー教育の危うさは野呂(2015)でも指摘されている。

4. 考察とまとめ

刊行時期とその前後の原発をめぐる状況を考えると、発行者である関西電力は訴訟や廃炉などで非常に危機感を持っており、その状況を切り抜けることが動機づけとなって本冊子を刊行した可能性がある。新幹線開業と関連づけることで観光案内を発行する必然性を確保し、1冊が右開きと左開きの両レイアウトを採用することで、原子力PRという観光案内とは全く異なる談話を1冊の中で同時に実践し、かつその談話や意図を非常に巧妙に目立たない形でテキストに組み込むことに成功している。ごく普通に存在しているテキストの中に、表面的な見え方と異なる意図が巧妙に取り込まれていることが明らかになった。社会で生きていくためにはこのような実践をを批判する目が求められる。日本語教育も批判的リテラシーの涵養を目標にすべきである。

参考文献

- ジークフリート・イエーガー(2010)「談話と知—批判的談話分析および装置分析の理論的、方法論的側面」
ルート・ヴォダック、ミヒャエル・マイヤー(編著)、野呂香代子(監訳)(2010)『批判的談話分析
入門—クリティカル・ディスコース・アナリシスの方法』第3章、三元社、pp. 51-91.
- 野呂香代子(2015)「環境・エネルギー・原子力・放射線教育」から見えてくるもの」名嶋義直・神田靖子(編)『3.11 原発事故後の公共メディアの言説を考える』第2章、ひつじ書房、pp. 53-100.

資料：「越前若狭 至高のありか 福井」(PDF ファイル版)

<<http://www.kepco.co.jp/corporate/info/community/wakasa/shikou/index.html>>2015.6.16